

巻頭言

東京国際工科専門職大学紀要が新しい科学知識の出現する広場になることを期待する

東京国際工科専門職大学 学長
吉川弘之

大学紀要第1号の発行は本学にとって大変うれしいことであり、これから本学の成長に従って、論文をはじめいろいろな記事が発表されて行くことを期待している。

専門職大学は新しい制度による新設の大学であって、理論と実践とが融合した教育研究を行う大学であるという定義が示されている。そこには過去に例のない新しく出現した現代社会における重要な課題の解決に必要な大学の貢献への期待があり、それにこたえる専門職大学は、大学の理念のみならず、大学改革の視点とされる3つのポリシーを含め、従来の大学とは異なる考え方が必要である。これらに対し、今、私たち専門職大学の運営にかかわるすべての人が、新しい方法を案出し、その実現に努力しているが、その中で最も重要なこととして専門職大学はどのような学問に依拠して教育研究を行うのかという課題に直面している。これは新しい制度の大学という以上、当然考えるべき重要な課題である。

大学は学問の府であると言われ、そこで行われる教育、研究そして社会貢献が学問に依拠して行われる。この学問という大学が依拠するものが、専門職大学と従来の大学とでどのように違うのかを考える必要がある。

長い歴史を持つ大学は、歴史的に積み上げられた多くの領域を持つ学問を継承し、それらをさらに研究して発展させ、またそれを根拠として教育を行ってきた。大学が他の社会的機関と異なるのは、その行為の根拠の違いである。

学問を根拠とするという基本は、伝統的な大学も新しい歴史の歩みを始める専門職大学も、大学である以上共通であることは言うまでもない。したがって多数の伝統的大学と新大学である専門職大学の違いを考えるとときまず考えなければならないのは、根拠とする学問の違いであると考えなければならないであろう。

伝統的な大学は長い歴史を経て到達した学問の構造に依拠して構成され文科、理科の分類を初めとして多岐に分かれた専門領域からできている。大学は専門領域ごとに区分された学部とさらに細分化された学科と呼ばれる組織を持ち、教員はこの区分に従って組織され、学生も各区分に所属する。全領域を含む大学が総合大学、単一の区分を持つ大学は単科大学と呼ばれることもあるが、いずれも教育研究は専門領域の区分に従って行われる。学生は特定の学科に属して学ぶのであるから、単一の専門領域を身に着けることが学習目的となり、卒業生は、卒業した学部、学科の持つ専門領域に対応する単一の専門領域知識を持つ者として社会に出てゆく。専門領域によっては、医師、弁護士などのように、領域固有の資格が与えられる。

しかし社会には、多数の専門領域知識を必要とする企業、官公庁、政治的諸機関などの多様な機関があり、それぞれが持つ社会的機能を果たすためには多種類の専門領域知識を必要とするので、それを満たすために多数の異なる領域知識を持つ卒業生を採用しなければ

ばならない。卒業生は採用された機関に職を得て、他の領域知識を持つ人々と協力しつつ、機関の機能達成に貢献する。これが大学教育の伝統的姿であり、特定専門領域を身に着けた卒業生を送り出すのが大学の重要な意義の一つと言われてきた。

ここで、大学は専門的知識の教育が役割であると考えて、異なる領域知識を持つ卒業生たちがどのような協力によって社会機関の機能を発揮するのかについては深い考察をしておこなったことを指摘しておかなければならない。極端に言えば、特定の専門知識を身に着ければ卒業の資格が与えられ、卒業生が社会でどのようにそれを使うかという課題は社会の諸機関の方針によるのであって大学では責任を持つ公的教育は行わないという方針であったと思われる。この伝統的な視点の問題点は最近の大学で指摘はされているが、少なくとも領域の協力問題が一つの学問分野として存在しているとは言えないであろう。

これに対し新大学である専門職大学は、同じく学問に依拠する教育研究を行うのであるが、専門領域ごとに研究教育をすることだけに関心を持つのではなく、さらに進んで多様な領域知識が社会に出た領域専門家の協力によって合成され、社会的機能を発揮する仕組みにまで関心を拡大するのである。その関心に基づく教育研究は、社会機関が機能を発揮するための行為での知識の使用状態に現れる領域知識の集合を対象とする。そのために大学の組織、構成は伝統的大学が依拠する区分された学問領域によるのではなく、社会における学問的知識の使用形態を反映した区分によって構成される。そして専門職大学の教育研究がこの区分に従って行われる。その結果卒業生は単一の領域知識の専門家になるのではなく、複数領域が組となって「使われる」状況、すなわち社会の諸機関で現実にあるいは将来において、複数領域の知識が作動する状況を学び取ったものとして、すなわち社会における職業人の視点を学習の中に包含しつつ学んだ者として社会に出てゆく。

このように、歴史的に発展してきた結果として存在する学問領域に従って、そのまま領域知識を教育した研究するのではなく、現実社会で作動している学問の領域集合体を対象として研究し、またそれに依拠して教育を行うことにより、一つの領域を究める専門家ではなく、社会の実際に存在する仕事に適合する「専門職」を育てるのである。専門職は、社会の中のデザイナーとして社会に貢献する。このことは学問に依拠すべき大学において、領域を守ることを使命とする伝統的な大学に加えて、従来の大学教育とは全く異なる「知識の使用」を基本的構造とする体系を持つ専門職大学が生まれたと考えてよい。

実はこの体系は、しばしばいわれてきた学際領域の学問とは全く違う。二つの学問領域を一つの学問にする努力は極めて高度な思索を必要とし、それは元の学問領域を個々の領域としては否定した形で現れるはずであり、どの領域も学際領域ができると考えることはほとんどできないと考えられる。学際領域は学問論の最も基礎的な課題として別に考えるべきものであり、今我々が考えている「領域の協力」とは別のものであると考えておく。

「知識の使用」を基本構造とする学問、それは対象存在について「整合的説明」を領域ごとに求めていく伝統的形式と違う形式の学問である可能性がある。専門職大学はこの知識の使用を基本構造とする学問を作っていきたいのであるが、これは思弁的に作れるものではなく、大学における教育と研究という現実の行動を基礎として作られる新しい学問である。おそらくそれは、現在の学問が思索と行動の長い時間をかけて成長してきたように、これから長い時間を必要とするであろう。

しかし、このような学問が緊急に必要であることはすでに言明されている。1999年に

ブダペストで UNESCO と ICSU の主催で開催された世界科学会議の結論として発表された宣言書の表題は「Declaration on Science and the Use of Scientific Knowledge」であり、科学的知識の理論がないままでの、社会の自由に任せた状態での「使用」がすでに数々の困難な問題を引き起こしていることを指摘したのである。このことを思い起こすと、専門職大学の設置は、この会議の要請に対する大学からの初めての回答であると考えられることができる。この会議での議論は、科学的知識は増えるほど良いものではあるが、それを「使う知識」も増やす必要があり、それを公的に議論するべきだという結論であった。そのため具体的な方法は宣言書に述べられなかったが、会議で私は学問の構造を変えるべきであると主張したのであった。その後 20 年、伝統的な大学での努力はあったが、長い歴史を経て完成した教育の構造をどのように変えるかについての明確な表明はまだされていない。

今、国際工科専門職大学で私たちが理念とする情報化社会における Designer in Society は、新しい学問構造に基づく大学における教育研究を目指すものであり、20 年前のブダペスト宣言の世界的な要請の実現を目指しているといえることができるであろう。

この実現の努力の主役は教育する側にいる教員、管理者、実務者あるいは企業などの学外協力者、そして受ける側にいる学生からなる共同体である。この共同体が課題に取り組み、社会にこたえる歴史が始まっているが、それは社会に開かれた大学として、歴史に現れる諸分野を俯瞰的に見ながら、「知識の使用に関する学問」という従来とは異質の知識の体系を実践的に作り上げるという大きな仕事に取り掛かることである。本学の紀要は、この新しい仕事の歴史的記録として貴重なものになることが期待される。